

韓国の教育現実と早期留学
－現実から今後を問う－

Studying Abroad at a Young Age and
Educational Issues in Korea

李 炫 姫
Hyunjung Lee

Abstract

Recently, the number of Korean students studying abroad at a young age has been increasing. This has led to an increase in separated families and the appearance of so-called “wild goose daddies.” This expression refers to fathers who stay in Korea in order to provide financial support for children studying abroad with their mothers. Educational researchers have discussed various problems with this arrangement. This paper, focusing on the phenomenon of “wild goose daddies,” which has resulted from having students study abroad at a young age, will examine some of the current problems with Korean foreign language education policy.

1. はじめに¹

韓国では、英語の早期教育、それによる私教育費の増加など、様々な教育環境における問題が早期留学²の増加につながっている現状がある。早期留学によって現れた非同居家族の形態と「雁パパ」の出現が、韓国における新たな社会・教育的問題として指摘されている点に本研究は注目した。家族が離れて暮らすことによる様々なリスクを抱えながらも早期留学を選択し「雁パパ」になる背景には、子どもの教育に対する如何なる親の意識が働いているのか、その意識は今後韓国の教育政策にどのように反映していくべきであるかを探ることが、本研究の目的である。

2. 研究の背景

2.1 外国語教育政策の流れと現状

韓国の教育科学技術部³は、1955年の第1次教育課程の制定以来、7次にわたって教育課程⁴を改訂してきた。1997年制定の「第7次教育課程」以後は、「2007改訂教育課程」を経て、現在は2009年12月に発表され2011年度から段階的に導入・実施され始めている「2009改訂教育課程」⁵期である。頻繁なる改訂の背景には、教育問題の発生や時代的要求によってより質の高い教育を求めるための要因もあるし、政権が変わることによる要因もあると思われる。韓国における外国語教育は現在、外国語である「英語」が初等学校(日本の小学校にあたる)3年次からの必修で、全7つの言語⁶から成る第二外国語は選択科目として中学校の段階か

¹ 本研究は、一部の予備調査を除いては2009～2011年度科学研究費補助金「若手研究(B)」を受けて行ったものである。(課題番号:21730682)

² 「早期留学」とは、外国の教育機関で6ヶ月以上の修学を目的に初中高校生が留学することを指す。韓国教育開発院(KEDI)の統計によると、早期留学者数のピークは2006年度の45,431名となっている。

³ 1955年当時は「文教部」という名称で、以後「教育部」と「教育人的資源部」という名称変更を経て、現在の「教育科学技術部」の名に至っている。

⁴ 教育課程とは、「学校教育において学生にどのような教育目標を、どのような内容と方法、評価を用いて成し遂げさせるかを定めた共通の、一般的基準のこと」で、日本の学習指導要領にあたる。

⁵ 「2007改訂教育課程」と「2009改訂教育課程」は、両方とも第7次教育課程に続くものではあるが、「第8次」という数字は付いていない点が特徴的である。

⁶ フランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語、日本語、ロシア語、アラビア語

ら学ぶことができるようになっている。特に「英語」の場合は、初等学校1年次から必修化されつつある現状もあり、韓国における外国語教育は多言語化だけでなく、低年齢化においても進行がかなり早い。つまり、韓国は韓国語を唯一の母語と定めているとはいえ、外国語教育の多言語化および低年齢化の現状は、如何に外国語を母語並みに駆使するかというところまで要求するようになりつつあると言える。特に英語は、低年齢化だけでなく、大学卒業単位における比重の拡大や、就職に向けてのスペック作りとしての重要性などが加わり、2000年以後「早期留学」の増加とそれに伴う社会問題をもたらしめている。

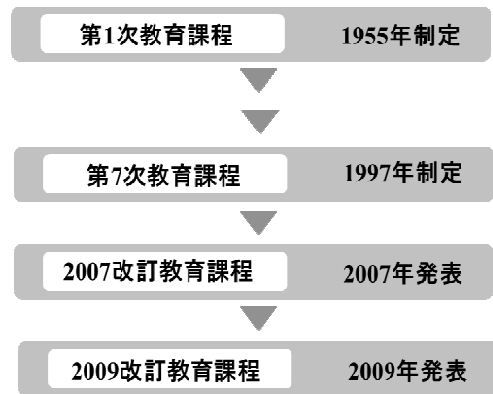


図1. 韓国の教育課程の変遷

2.2 「雁^{かり}パパ⁷」の登場

韓国における「早期留学」は、英語教育の早期導入によって新たに現れた現象ではない。しかし、留学の形態においては、1990年代前後までは子どもの一人留学が大半であったものが、英語の初等学校導入以後の2000年代からは母親が同伴する留学の形態が増えた。形態の変化は、留学先での不適応やUターン、犯罪などの問題に起因しており、母親が同行する早期留学が増えてからは不適応や犯罪などの問題は多少減ったという報告がある。しかし、この母親同伴の早期留学によって新たに現れたのが「雁^{かり}パパ」という非同居家族の形態である。

「雁^{かり}パパ」とは、韓国語の「기러기아빠 ;キログアッパ」を訳したもので、「母親と子どもを留学させ、収入の7～8割以上を子どもの留学費用として送金しながら一人で暮らす父親」を指す。「雁」という鳥の名称が付いた背景は、「雁」は夫婦間の仲が良い鳥と知られ、韓国の伝統的な結婚式では一生を共にする象徴的な意味を持っている。特に、子どもへの愛情は格別で、如何なる目に会っても子どもを見捨てることは絶対しないという。韓国の『朝鮮日報』では、「『雁』の習性が21世紀の韓国の教育実情を最高に比喻することになった」と伝えながら、年々増加している海外への早期留学者数の現状を指摘している(2004年11月28日紙)。同紙によると、雁^{かり}パパの送金額は月平均400万ウォン⁸以上と見られるとしている。「雁^{かり}パパ」現象は2000年以後、経済的な負担や寂しさ、夫婦の不仲など、様々な要因が絡まって自殺に至る社会問題としてしばしば指摘されるようになり、最近はより敏感で扱い難い話題の一つになっている⁹。

⁷ 「雁^{かり}パパ」という用語は学術用語ではないため研究によって異なる訳も見られるが、本研究では研究当初から「雁^{かり}パパ」として用いている。

⁸ 2012年7月の平均レートで考えると、約30万円と換算できる。

⁹ 「雁^{かり}パパ」用語と先行研究に関するより詳しい内容は、李(2007:117-118)(2008:62-63)を参照。

では、様々なリスクを抱えながらも「雁パパ」が子どもを早期留学させる理由は、単に「英語教育」のためだけであろうか。もちろん、留学者数の増加には英語の早期教育の現状との関わりが深いものの、必ずしも英語教育だけが留学の目的であるとは言い切れない。本研究では、量的調査および「雁パパ」を中心とした質的調査のデータ分析を通して、早期留学の背景には英語習得のほか、如何なる教育現状における問題が関わっているかを考察した。

3. 調査概要

3.1 量的調査

量的調査は、本研究の入り口とも言える「韓国教育現実における問題」を究明するために行ったものである。調査データは、韓国の大学生(予備調査49人、本調査150人)、および初等・中等教育の子女を持つ親(139人)に対して、韓国教育現実における意見を聞いたもので、収集データはMicrosoft Excel 2007で集計し分析を図った。結果、学校教育における英語教育の重要度だけでなく、激しい教育競争や私教育費の負担、入試中心の教育など、韓国の教育現実における様々な問題が浮き彫りになった。

3.2 質的調査

質的調査では、早期留学による「雁パパ」の登場について多角的な面から分析を行うため、雁パパを含む計21人に対するインタビューデータを収集した(うち、5人は予備調査時のデータ¹⁰)。インフォーマントは表1の通りで、それぞれのインタビューは録音の了承を得たうえで、半構造化インタビューで行われた。収集したインタビューデータは文字起こしをしたうえで和訳し、分析対象となる言及部分を抜粋した。抜粋した部分は、KJ法に基づいて分類を図りながら、一部は修正版グラウンデッドセオリーアプローチ(M-GTA)を混合した。M-GTAによる分析は、調査対象者一人一人の事例における特性を導き出すには有効であるとは言えないものの、KJ法

だけでは見出しにくい当該現象を説明できる概念やカテゴリーを生成する面での容易さから、分析補助として加えた。

分析の結果、大きく6つのカテゴリーを生成することができ、それらはさらに上位概念として23概念に分かれた。

表1. インフォーマントの略名および職業¹¹

略名	職業	略名	職業	略名	職業
MP1	自営業	MK2	教授	FK1	主婦
MJ	教授	MP2	医者	MC2	大学職員
MY1	教授	MC1	医者	FK2	大学職員
ML1	教授	MK3	自営業	FL2	大学生
MK1	医者	MK4	医者	FB	大学生
ML2	教授	FS	画家	MY3	大学生
MY2	教授	FL1	自営業	MK5	大学生

¹⁰ 予備調査は「桜美林大学言語教育研究所2006年度研究助成金」を得て行ったものである。

¹¹ 予備調査以外のインフォーマントは、科研費による2009～2011年の間に行った調査対象者であり、全ての職業は調査時点に基づいている。なお、表における略名の見方は「MP1」の場合、「M→男性」「P→名字の頭文字」「1→同性・同名字の中でインタビュー時期でみた順番」となる。

また、上位概念23のなかの4つの概念からは全20の下位概念を分類し項目化することができた。

4. 分析結果と考察

4.1 量的調査における結果

量的調査の結果、早期留学の背後にある韓国の教育現実における様々な問題が浮き彫りになった。

まず、初等・中等教育の子女を持つ親139人に対して子どもの英語教育の開始時期を質問したところ、4割近い51人が「初等学校入学前」と回答した。初等学校における英語教育の導入以来、初等学校入学以前の段階から英語を学習させるケースが増えており、親にはその分の私教育費の増加をもたらしていることが予想できる。公教育段階の前から英語を学習させた理由としては、「1位:外国語は早ければ早いほどいいから」「2位:子どもの将来のため」「3位:周りでみんなさせるから」という意見が上位3を占めた。近年、韓国では公教育に対する不信¹²、いわゆる「公教育の教育内容はレベルが低くて信頼できない」という評価が出ているなか、アンケートの結果こそ「公教育への信頼度の低さと私教育への依存との相関関係」が窺えたものであると言える。

一方、大学生および初等・中等教育の子女を持つ親、両方に共通して「雁パパたちが子どもを早期留学させる理由」を全12の選択肢から複数回答で聞いた結果、それぞれの上位5までの回答として得られたのが次の表2と表3である。

表2. 大学生側の上位5の回答

順	回答内容	回答数
1	英語の勉強のため	115
2	外国が教育環境の面で良い	107
3	子どもの視野を広げるため	99
4	学校教育不満と私教育の依存	72
5	韓国の入試中心教育への不満	71

表3. 親側の上位5の回答（回答は延べ数）

順	回答内容	回答数
1	英語の勉強のため	111
2	子どもの視野を広げるため	95
3	韓国の入試中心教育への不満	83
4	外国が教育環境の面で良い	79
5	韓国の教育熱が嫌い	56

順位における若干の相違は見られるものの、大学生側も親側も上位5に入った回答内容では一致する部分が多い。また、1位としては両方とも「英語の勉強のため」を挙げる結果となっているが、他の回答数との差はそれほど大きくない。つまり、雁パパが子どもを早期留学させる理由は、「英語の勉強のため」が最も大きな目的ではあるものの、他にも様々な教育現実における問題が絡み合った結果からの選択であると、一般の人たちも解釈しているこ

¹² 「公教育への不信」は、次の理由が関係した結果であると思われる。

- ① 1980～90年代に私教育を抑えようとする政策が強く、その結果むしろ反感を得てしまったこと
- ② 高い教育熱が私教育とうまく一致したこと
- ③ 頻繁なる教育課程の改訂による入試制度の変化に、私教育より公教育現場の教師たちの吸収力が遅かったこと

とが窺えたと言える。

特に、親に対する質問項目では「子どもの早期留学を考えたことがあるか」を設けたところ、139人中93人が「はい」と答えた。その理由の上位5の回答が図2である。「子どもの視野を広げるため」の回答数が、「英語習得のため」より多く、早期留学選択の背後には「韓国の教育現実から脱皮し子どもの視野を広げさせたい」という目的がより大きいことが推察できる。

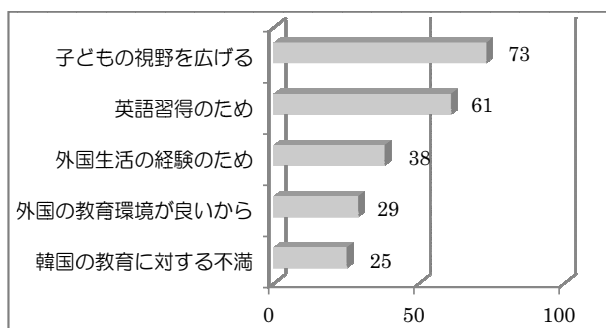


図2. 早期留学を考えた理由(回答は延べ数)

入試中心教育で受験戦争の激しい韓国では、前述した通り教育課程そのものが政権交代の度に改訂される問題がしばしば指摘されているなか、改訂と共に改変される入試制度は、生徒と親側にとって不安と不満の声の元になっている。同時に、英語の早期教育によって親たちには私教育費の更なる負担ももたらした。その負担に比べて、学校教育は満足できるものではないことから、受験戦争の激しい韓国社会から逃避し、より良い教育環境のなかで教育させたい、という親の意識が働いた結果が早期留学の増加につながっている可能性が量的調査から窺えた。

4.2 質的調査における結果

質的調査のデータは、雁パパ12人、子どもを留学させた経験のある母親3人、早期留学の経験を持つ社会人2人、早期留学を考えたことがある大学生4人、計21人に対するインタビュー調査の結果である。

分析の結果、6つのカテゴリーと、23の上位概念に分けることができた。また、上位概念23のなかの4つの概念からは全20の下位概念を分類し項目化することができた（最後のページの別表参照）。以下では、それぞれのカテゴリー別に見られた内容の結果を必要によっては実際の言及も一部交えながら述べていく。

4.2.1 カテゴリー(1) きっかけ

子どもの早期留学を選択した「きっかけ」のカテゴリーは、「親の留学」「本人の希望」「親の転勤」「家庭の事情」という4つの概念に分かれたが、最も多く見られたのは「親の留学」である。インフォーマントのなかで、実際雁パパの経験を持つ12人の職業を見ると、図3のように大学教授が最も多いことが分かる。前述した通り、雁パパが登場して以来、寂しさだけでなく経済的な困難や夫婦の不仲など、様々な原因から自殺に至る雁パパがメディ

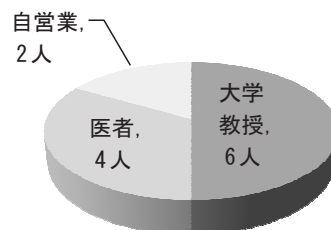


図3. 雁パパ12人の職業

アを通して指摘されることもあり、雁パパ現象はより扱いにくい敏感な話題になっている。よって、雁パパからインフォーマントとして協力を得ることは大変厳しい状況があると言える。しかし、大学教授の場合は、学位取得のため自らが留学し、後で母親と子どもが現地に残ったパターンが多い¹³。そのため、わざわざ子どもを早期留学させたわけではない、いわゆる「自分たちは社会的問題になっている雁パパとは異なる立場」という差別化した意識が働き、インタビューに応じてくれるケースが割と多いことが考えられる。

4.2.2 カテゴリー(2) 理由・目標

子どもを早期留学させた理由・目標に関しては、量的調査の結果からも見られたように「英語教育」に関する言及がどのインフォーマントからも窺えた。但し、英語教育だけに起因しない、概念6～概念10のように様々な理由と目標から早期留学を選択していることが分かった。特に、概念6「教育現実の問題」は別表で示しているように8つの下位概念としてさらに分類することができ、量的調査から見られた教育現実上の様々な問題が質的調査からも浮き彫りになった。「激しい教育競争によって友達さえも競争相手に過ぎない」こと、「暗記中心・創意力の無い教育は単なるスペック作りの勉強に過ぎない」といった結果から、如何に韓国教育現実への問題と不満が早期留学の増加を促している現状であるかが窺えたと思われる。

4.2.3 カテゴリー(3) 雁パパとして

カテゴリー3では、雁パパになる背景には「子どものためなら」という親の意識が強く働いていることが窺えた。韓国の親たちは「子どものためなら親は犠牲になって当たり前」という意識を持っており、家族の生活も子どもの教育中心になっている傾向が強い。早期留学に伴う費用は生活費だけで1カ月平均300万ウォン前後と高額であるにも拘らず、インフォーマントたちからは「経済的に支援ができるなら、それは当然行かせるべき」との言及が幾つも現れ、子どものためなら経済的な支援は惜しまない親たちの意識が窺えた。

一方、この「子どものためなら」の上位概念は、さらに「父は金稼ぎの機械」「夫婦仲における問題」「家族観の変化」という下位概念に分かれた。次が「父は金稼ぎの機械」に関連する言及内容の一例である。

ML2	久しぶりに会っていろいろ話し合いたかったから、学校生活のこととか一応話題になることをいろいろと聞いてたら、多分息子はお説教のように聞こえたんですね。でも、ひどすぎる、だって私に対して「 <u>お父さんはお金さえ送ってくれば良いでしょう</u> 」と。
I	ええ？それで何と？
ML2	一瞬何を言われたか分からなかったけど、あ、 <u>この子にとって私はそんな存在かと</u> 。これ以上はダメだと思って、一緒に帰国しようと（後略）

¹³ 本人の留学によって子どもがそのまま現地に残った例は、MJ/MY1/ML1/MK1/LM2/MY2の計6人で、MK1(医者)以外は全員大学教授である。

つまり、子どものために父親は経済的な部分を担当し、母親は子どもの世話と教育を担当するという、夫婦間の役割分担から出来上がったのが「雁パパ」であるものの、その努力とは裏腹に、子どもには「父親は単なる金稼ぎの存在に過ぎない」との認識をもたらすケースもあることがML2さんの例から分かる。類似した例はMP2さんからも窺えた。

その他、寂しさだけでなく、非同居による家族観の変化や夫婦像の変化など、様々なリスクに直面しながらも子どものために我慢して支援を続ける雁パパたちの様子が分類した概念から多く窺えた。

4.2.4 カテゴリー(4) 言語評価

早期留学の理由が必ずしも英語教育だけに限るものではなく、様々な教育現実に起因していることはこれまでの調査結果から分かったことである。しかし、経済的な支出はもちろん家族が非同居することによる様々なリスクを抱えながらも、早期から子どもを留学させる雁パパの期待としては、やはり子どもの言語における「バイリンガル」¹⁴は大きいものであると思われる。

調査データからは子どもへの言語評価として、「完全バイリンガル」「部分的バイリンガル」「制限的バイリンガル」の評価がそれぞれ現れ、なかでも「部分的バイリンガル」の評価が最も多く見られた。特に、インタビューの初期段階では「完全バイリンガル」である評価から、時間が経つにつれ評価が「部分的バイリンガル」に変わる例がよく見られた。つまり、両言語とも一定のレベルに達している点から「完全バイリンガル」であると評価はしたものの、インタビューの流れのなかでどちらかに問題があることに気づいたり、日常では支障の無いレベルではあるが畏まった場での表現力は足りない部分があることに気づいたりする例が見られた。特に、親の留学によって子どもが留学先で生まれ育ったケースでは、断然韓国語の面が弱く、それによる家族間のコミュニケーションが円滑ではない例も見られ、子どもの言語面に関しては割と客観的な評価を下す親の様子が窺えた。

4.2.5 カテゴリー(5) アイデンティティ

健全な思考を持つ人間形成においてアイデンティティ確立は大いに関係している。それが国家・民族的アイデンティティであれ、個人あるいは社会・文化的アイデンティティであれ、子どもにとってアイデンティティの混乱は自己を確立できない人間になる可能性もある。母親が留学に同行する雁パパの登場によって、一人留学の時代に比べると留学先で犯罪を起こす問題や不適応によるUターンなどは多少減ったと言われている。しかし、家族がわざわざ離れて住む形を選択する早期留学は、子どもにとっても親にとっても不安要素は多いはずである。言い換えると、離れて暮らしていても子どもが「家族」の概念や、韓国人としての民

¹⁴ 定義においては、小柳(2004:162-163)の二言語の到達度による、完全バイリンガル(proficiency bilingualism)、部分的バイリンガル(partial bilingualism)、制限的バイリンガル(limited bilingualism)の3分類に基づいている。

族・国家的アイデンティティをしっかりと持つことができる場合、親は「雁パパ」の決断について満足することにつながると言えるのではないか。インタビューでは、このような「雁パパ」の決断が間違いではなかったという結果をもたらすために、子どもに対して韓国人としての意識や家族としての意識を常に強調しながら様々な努力をする親の姿が窺えた。概念18の「家族観重視」では5つの下位概念としての働きかけが見られる。例えば、「家族同士では韓国語での会話を徹底する」ことはもちろん、家族としての結束と親子としての関係を再確認するための手段として「電話」「メッセージ」「チャット」などを常に交わすことや、時間が許す限り「旅行」に出かけるなど、子どもへの持続的な関心が重要であると主張する親の姿が見られた。このような努力によって、子ども自らしっかり自己形成し、自分が進むべき道へ進んでいく姿が見られれば、「子どものためなら親は犠牲になって当たり前」と思って選択した雁パパの役割が間違いではなかったという安心につながるのが現実であると思われる。

しかし、言語使用とアイデンティティの相互依存的な関係から考えると、次の言及例のように留学先で生まれ育った子どもは彼らが所属しているコミュニティやネットワークが既に出来上がっているため、MJさんが述べているように韓国人としての民族・国家的アイデンティティを求めることはもはや困難な現実もあることが分かる。類似する例は、MY1さん、ML1さんの言及でも見られた。

I	アメリカで生まれたわけですから娘さんにとっては英語が主言語になっているでしょうね。
MJ	<u>うちの子は、英語が母語みたいなもんです。(中略)</u>
I	親から見て韓国人としてのアイデンティティの確立という面ではどう思われますか。
MJ	まあ、 <u>ほぼアメリカ化したと考えたほうがいいでしょう。</u>
I	ええ、例えば？
MJ	例えば、親子間の情に関して話したりすると、 <u>韓国はねばねばした情じゃないですか。でも、子どものほうはそれが理解できないみたいで、「なぜ？」</u> と言われますね。
I	そんな時はどのように結論を？
MJ	<u>結論は無いけど、親として理解してあげるしかないですね。一生アメリカに住むならむしろアメリカ人になったほうが良いし。(後略)</u>

早期留学の増加だけでなく、今日のような文化が交差する社会においては、上記の例のように唯一無二の民族・国家的アイデンティティを求めること自体が無理になりつつある面もある。しかし、今後どの社会で主に活動していくかは別として、いわゆる自己の内部に焦点を当てた観点から考えると、自己アイデンティティ(自己同一性)を自ら確立することは大変重要である。グローバル人材という目標を掲げて簡単に発つ早期留学が、今後自己のアイデンティティを構築できないまま、どの社会にも適応できない人間になる結果をもたらす恐れもあることを看過してはいけない。つまり MJ さんの例でも、ほぼアメリカ化したからといってそれに完全同化するのではなく、自分が生きている社会と、家族でつながっている社

会、両方を客観的な目で解釈しながら自己アイデンティティを確立していく過程が求められる。このような過程を経ての自己アイデンティティを確立してこそ、自らの能力や資質を周りの環境と調和していくことができる、それこそ真のグローバル人材として成長することができると思われる。

韓国の『世界日報』によると、「早期留学後、韓国の初・中・高校に編入したいいわゆる『帰国子女』を対象に行った調査結果、アイデンティティの混乱や韓国の学校への不適応などによって再び留学を希望する例が8割以上であった。しかし、その中の2〜3割は韓国だけでなく、留学先の学校でも上手く適応できない状態であったと把握している」と伝えている(2012年7月18日紙)。早期留学への情報不足のまま安易に留学に発つことで、両社会でアイデンティティ確立における困難が生じたことが予想できることから、国家レベルでの客観的で正確な情報提供のもと、早期留学による副作用を減らす努力が韓国の行政側には問われている現状であると言える。

4.2.6 カテゴリー(6) 留学の結果

雁パパとして頑張った結果、子どもの留学は成功であったかどうかに関しては、カテゴリー6で分かるように「まだ分からない」という評価、「不適応によって帰国しているので成功とは言えない」のようなマイナス評価も見られた。注目できるのは、概念22と23で示されている、「適応しているがいずれは帰国させる」という評価と、「適応しているから将来も留学先で活躍してほしい」という評価が半々現れた点である。これはデータ分析の流れで見ると、図4のように解釈・分類することができる。

図の矢印の太さは親の希望度における強弱を示すものである。つまり、自分の子どもが完全バイリンガルであると評価する親であればあるほど韓国社会に戻らず留学先の社会で活躍してほしいという意識が強く、制限的バイリンガル評価あるいは不明の評価の親であればあるほど、いずれは帰国し韓国で大学進学する予定という意識を持っていることが窺えた。

グローバル社会の人材として韓国の若者たちが世界で活躍できることに誇りを持つべきである反面、未来を背負っていく人材を輸出するばかりの国にならないための模索も重要な現実であることがこの図から言えよう。

なお、示した図4に関しては、客観性を示すためにより詳しく探るデータがあることが望ましい。しかし、この結果は親側が子どもの言語面だけを考えて下している評価であるとは限らず、いわゆる調査者からは導き出せない家族関係や家庭内の事情など、プライバシー的な面が関わり合っていると判断される。これは質的調査における限界とも言える点から、今

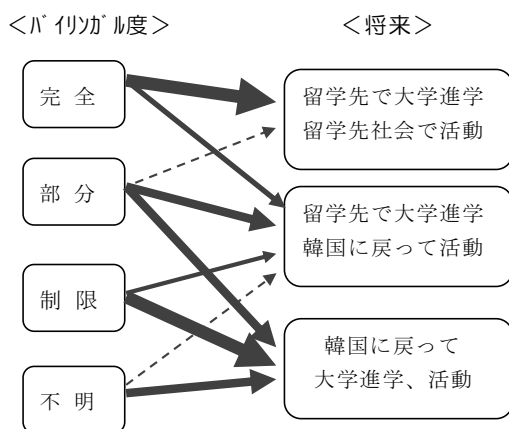


図4. 言語評価と将来希望の相関

後の課題としたい。

5. 現状から今後を問う

以上、本研究における量的調査データと質的調査データの分析から見られた「早期留学と雁パパ」に関わる現実と問題について、カテゴリー別に分けて考察結果を述べてみた。早期留学させた結果が成功であったか成功ではなかったかに関する判断は、本研究の調査データから明白に推察することは容易ではない。しかし、成功の有無とは別に、カテゴリー3～6にかけてインフォーマント全員から窺えたのは、「良い教育環境で勉強させることができる(できた)点で満足している」という評価であった。

一例として、1994～2000年の間に留学に発った世代が10年前後の留学生生活を終えて韓国社会に戻ってきた100人を対象に行った調査記事によると、「留学に投資した分満足できる結果が得られた」、あるいは「自分の位置をしっかりと確立できた」、と答えた人は半分程度に留まったとしている。その理由としては、「10年も離れていた韓国社会は改めて適応を必要とする『もう一つの外国』になっていた」という意見が最も多く、それによる「情報の不足」や「韓国の組織文化への懸念」などが就職への障害になっていると伝えている。時間的・経済的な投資から考えると厳しい留学結果であると認識できる。しかし、この調査でも「韓国にいる友達に比べて幸せな学校生活を送ったことに満足している」とほぼ全員が評価したとしている¹⁵。

早期留学の現象は英語教育だけに起因しているという認識から脱皮すること、とりわけ外国語教育を含む教育全般の目標を改善し、教育現場においては良いプログラムを支援・拡大していくことで、公教育の位置を取り戻し連携していくことが韓国の教育現実における急務であると言える。インタビューデータの中では、雁パパ以外のインフォーマント6人¹⁶のなか5人も「経済的な面さえ許されれば、将来私の子どもも早期留学させたい」という言及をしていた。つまり、韓国の教育現実における問題が抜本的に見直されない限り、教育熱の高い韓国としては早期留学による雁パパ現象は今後も続くものと思われる。

もちろん行政側も早期留学の問題を改善しようと努力を注いできてはいる。しかし、問題は「英語教育」、特に初等教育の英語ばかりに焦点が当てられている傾向が強いことである。なかでも「英語村¹⁷」の場合、2006年度をピークに早期留学者数が少しずつ減っている現状から、導入におけるポジティブな評価も多少得ている。反面、莫大な赤字を背負いながらの運営、そして初等学校の英語プログラムだけに集中し過ぎて中等・高等教育への連携が足りない、という指摘も多い。このような行政側の初等教育だけに偏った政策によって、教育段階間の連携の無さと目標のズレが生じている。

¹⁵ 朝鮮日報のオンライン紙「chosun.com」2009年6月23日の記事の一部引用。

¹⁶ 早期留学経験を持つ社会人(MC2/MK2)と、早期留学を考えたことがある大学生(FL2/FB/MY3/MK5)の計6人である。

¹⁷ 「英語村(English village)」とは、韓国の地方自治団体が中心となって、早期留学を減らし、私教育費を軽減させるための対策として作った英語教育施設である。

図5は、複数のインフォーマントから指摘された英語教育の現状問題を示したものである。つまり、初等教育での英語は親しむものとしてのプログラム構成になっているものの、それが中・高校に上がるにつれて入試中心の内容と目標に変わってしまう。また、大学になると就職のためのスペック作りの英語教育になってしまうことから、教育段階間のアーティキュレーション（連関）は全く見られない現実を指摘している。英語に楽しむことができるプログラムが初等教育段階に沢山組み込まれたとしても、それが中・高校教育につながらないことには意味が無い。それぞれの教育段階で目指す目標と内容が相違し過ぎている現実、その連携・連関の余地も見当たらない。

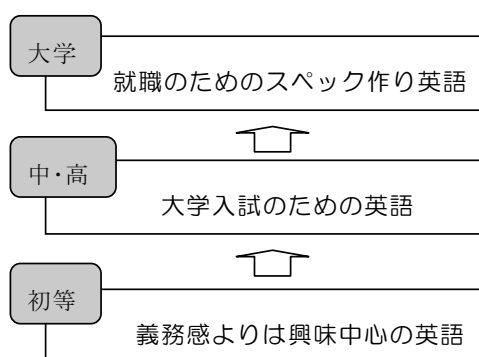


図5. 教育段階による目標・内容の変化

以上の点は、早期英語教育がスタートしつつある日本に対しても示唆する部分がある。上手に言語を駆使できる人が必ずしもグローバル人材であるとは言えないこと、外国語教育の目標が何であるべきかへの認識を改め、教育プログラムにおける教育段階間で連携を図ることが韓国だけでなく日本も今後の課題になると思われる。特に、日本はスタート時点にいたからこそ、行政と教育現場が協力し合って教育プログラムの編成と運営面で共に練り上げていかなければならない。韓国に比べると私教育への依存度がそこまで高くはない日本の現状を十分活かし、連携による学校教育内容の充実を図っていくことが、小学校で持った興味と学習動機を次のステップまで維持していく教育環境につながると思われる。

6. おわりに

本研究は量的・質的研究の両面から、韓国の「早期留学と雁パパ」現象の背景には如何なる親の意識が存在しているのか、その意識は韓国の教育現実とどのような関わりがあるのかを究明することを試みてきた。量的・質的調査データの分析を通して、ある程度の理論的サンプリングはできたものの、まだ十分とは言えない。また、雁パパ現象は社会的な変化とともに今後も追っていく必要があるテーマでもある。今後、雁パパ現象を早期留学の実態のみならず、より多角的に追うことで、理論生成および本研究における妥当性をより確保していくべきである。同時に、少しでも韓国の教育現実における改善や教育方法への具体的なヒントも得られることを期待する。

なお、本研究で取り上げた雁パパ対象の調査データは、前述した通り一定の職業に偏っている面もあり、分析結果もそれに左右されざるを得なかった可能性も考えられる点から、得られたデータ結果が必ずしも韓国の雁パパの現状を全て表すものではないことを断っておきたい。

【参考文献】

- 川喜多二郎（1986）『KJ法：渾沌をして語らしめる』中央公論社
- コリン・ベーカー 著、岡秀夫 訳（1996）『バイリンガル教育と第二言語習得』大修館書店
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い－』弘文堂
- 小柳かおる（2004）『日本語教師のための新しい言語習得概論』スリーエーネットワーク
- 戈木クレイグヒル滋子（2005）『質的研究方法ゼミナール(増補版)－グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ－』医学書院
- 李炫姪（2007）「バイリンガルを目指す早期留学支援の現状」『桜美林言語教育論叢 第3号』桜美林大学言語教育研究所 pp.115-126
- （2008）「韓国の外国語教育政策と早期留学－親の意識から現状を探る－」『言語政策 第4号』日本言語政策学会 pp.58-78
- 이현지(イヒョンジ)（2010）『조기영어교육의 영향（早期英語教育の影響）』済州大学校教育大学院 修士論文
- 金泰勲（2007）「韓国の初等学校における英語教育の現状と課題」『教育学雑誌 42』日本大学教育学会 pp.75-94

＜別表＞ 質的調査の結果分類項目表

カテゴリー		上位概念		下位概念
1	きっかけ	1	親の留学	
		2	本人の希望	
		3	親の転勤	
		4	家庭の事情	
2	理由・目標	5	英語教育	
		6	教育現実の問題	<ul style="list-style-type: none"> ・ 暗記・注入式教育 ・ 激しい競争、友達も競争相手 ・ 入試中心の教育 ・ 大学だけが目標 ・ 創意力の無さ ・ スペック作りの勉強 ・ 私教育費の負担 ・ 加熱した教育熱
		7	外国の教育環境の良さ	
		8	子どもの視野拡大	
		9	留学経験のある人に有利な社会	
		10	その他	
3	雁パパとして	11	子どものためなら	<ul style="list-style-type: none"> ・ 父は金稼ぎの機械 ・ 夫婦仲における問題 ・ 家族観の変化
		12	寂しい	
		13	我慢	<ul style="list-style-type: none"> ・ スポーツ ・ 山登り ・ 知り合いとの交流 ・ その他
4	言語評価	14	制限的バイリンガル	
		15	部分的バイリンガル	
		16	完全バイリンガル	
5	アイデンティティ	17	国家・民族的アイデンティティ重視	
		18	家族観重視	<ul style="list-style-type: none"> ・ 親子関係を強調 ・ 電話 ・ メッセンジャー、チャット ・ 旅行 ・ 持続的な関心
		19	子どもに任せる	
6	留学の結果	20	まだ分らない	
		21	不適応→帰国	
		22	適応→いずれは帰国	
		23	適応→留学先で活躍	